

山岳警備隊 出動せよ！

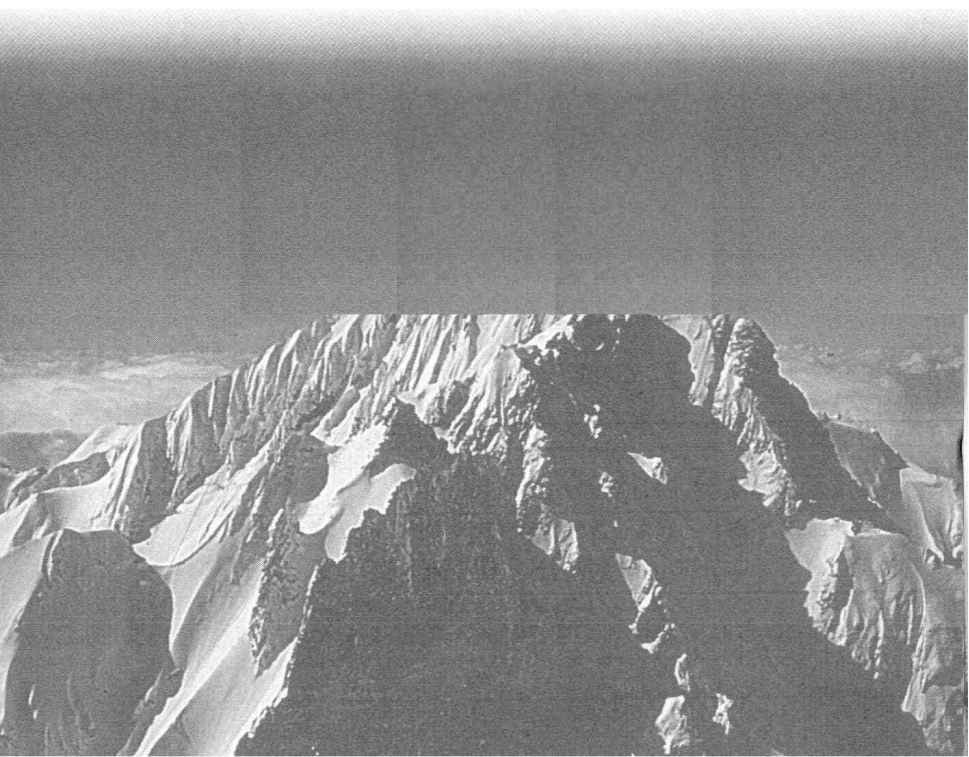
富山県警察
山岳警備隊 編



山岳警備隊 出動せよ！

富山県警察山岳警備隊 編

東京新聞出版局



山岳警備隊 出動せよ！

1996年7月27日 初版発行

1996年8月8日 2刷発行

編 者 富山県警察山岳警備隊

発行者 二 川 ・ 和 弘

発行所 東京新聞出版局

東京都港区港南2-3-13

中日新聞東京本社

振 替 口 座 00150-0-5497

電 話 03-3740-2674(直通)

FAX 03-3458-0689

印刷・製本 長苗印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©1996/TOYAMAKEN KEISATSUHONBU Printed in Japan

ISBN4-8083-0571-2 C0075

山岳警備隊 出動せよ！

落ちるなら、富山県側へ——まえがき

すごい男たちがいる。

荒々しい山容を誇る北部北アルプスの盟主・劔岳のふもとに、その男たちはいる。

たとえば——、ガイドブックで所要時間六時間半と記されている劔岳早月尾根（馬場島→早月小屋間）の急登を、わずか二時間で登りきる男がいる。あるいは、今年で四十四歳になる年齢にもかかわらず、いまだに現役の駅伝選手として活躍し、そこに遭難者がいる限り、絶対に退くことを知らない強靱な意志力と体力から、「鉄人」と呼ばれて久しい男がいる。さらに、十八歳で県のスキューバチャンピオンになり、その実力をもつてしても最初の訓練合宿で血のションベンを流し、自らのふがいなさに、悔し涙を流した男がいる。その男は今、年間二百五十日余りを山で過ごし、独特のときまされた嗅覚で、天候悪化の兆しの風を読む。そして、「危険を買う男」。仲間うちでそう呼ばれる度胸満点のこつ男は、意外なことに酒を一滴もやらず、しかし煙草は平然と吸い、妻と三人の子と、マーシヤンをこよなく愛す。分厚い胸板に、秘めた山への情熱はとこまでも熱い。

これら屈強なうえにも屈強な、しかも人間味豊かな男たちがいるからこそ、北部北アルプスの、富山・

長野・岐阜三県の県境を行く登山者の間で、いつしかこんな言葉がさやかれるようになったのだ。

「もし稜線で落ちそうになったら、富山県側へ落ちろ。どんなに危険な現場でも、誰ひとり近づけないようなところでも、彼らならきつと助けに来てくれるから」と。

遭難者に、最後のよりどころとして頼られる彼らこそ、富山県警察山岳警備隊員である。

——落ちるなら、富山県側へ。

この言葉は彼らに与えられた、最大級の賛辞にはかならない。

日本一の山岳レスキューといわれる富山県警察山岳警備隊は、一九九五（平成七）年、設立三十周年の節目を迎えた。隊員の技術・体力、県警ヘリや自衛隊ヘリと連携した迅速な対応、充実した救急医療体制、民間協力機関の深い理解、さらに行政のバックアップと、いずれを取っても日本一の名にふさわしい布陣をしている。しかし、いかに技術・装備が向上し、バックアップ態勢が整おうとも、遭難現場が修羅場であることに変わりはない。山岳警備隊員にいる限り、彼らに命の休日はない。

警備隊員である一方、優秀なアルピニストでもある彼らは八五年、山岳同好クラブ「岳翔会」を結成した。本書はその会報「岳翔」の原稿と書下ろしで構成した、迫真の山岳遭難救助記録である。かけがえない命を救うために、あるいは山で散った命を家族のもとに返すために、命懸けで遭難救助にあたる、男のなかの男のドラマである。

今この時も、男たちは次の指令を待っている。

「山岳警備隊、ただちに出勤せよ」

山岳警備隊 出動せよ！ 目次

まえがき——落ちるなら、富山県側へ……………2

第一章 生死を分けた一瞬

山稜の光と影——高瀬 洋……………12

死線を超えて——谷内六治……………40

悲しみの北壁——金山康成……………49

奈落からの脱出——横山 隆……………57

第二章 山岳警備隊員への道

山岳警備隊員への道……………64

私は新米山岳警備隊員——村上修……………74

大ハングを越えて——久々湊禎……………79

積雪期山岳遭難救助訓練記——米澤孝博……………88

雪稜に祈る——谷口凱夫……………93

第三章 救助活動の現場から

日本一のレスキューを支える最新装備……………116

MISSION SAR——高橋 究……………126

陸上部隊、いさ出動！——佐伯乗彦……………134

訓練の成果——米澤孝博……………139

台風下の現場出動——長根尾泰則……………144

ツアー登山の落とし穴——高瀬 洋……………149

やつぎばやの遭難救助——谷内六治……………158

第四章 出動までの二十分

出動までの二十分……………166

第五章 還らざる者たち

ある大学生の死——谷内六治……………184

黒部川に散った老姉妹——横山 隆……………189

氷塊飛び散る黒部川下の廊下——金山康成……………194

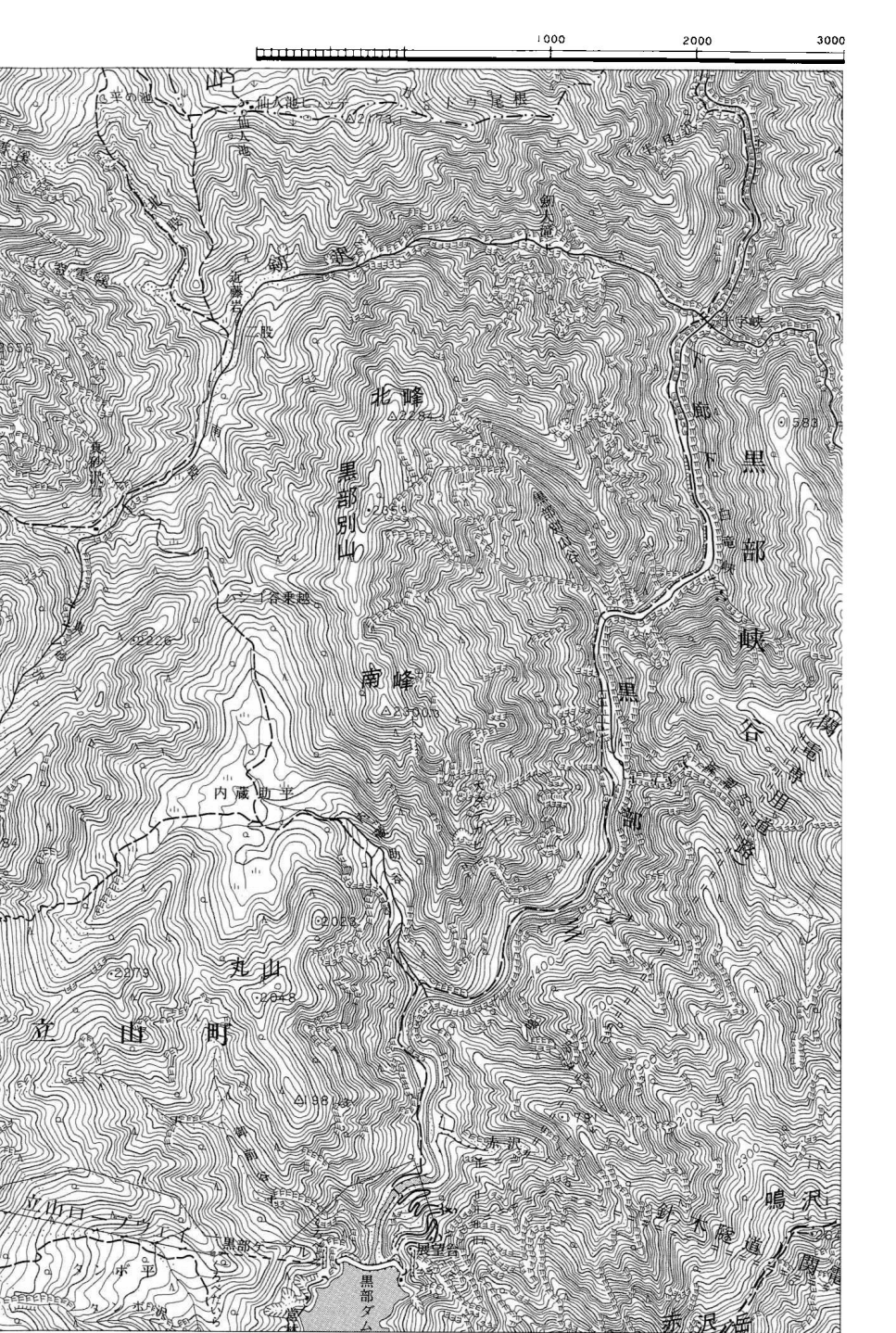
高嶋石盛さんの死に思う——西本隆夫……………200

白魔からの生還——清水正雄……………	205
--------------------	-----

第六章 山に笑い山に泣く男たち

夏の劔沢——西本隆夫……………	240
常駐隊の生活と苦悩——佐伯乗彦……………	246
風前の灯——佐伯謙一……………	254
世相を反映した二つの遭難——土井恒吉……………	258
久しぶりの遭難現場——佐伯信和……………	266
後立山の掟——真藤雅弘……………	274
あとがき——より強靱な山岳警備隊を目指して……………	282

*本文中 各筆者のトにカノコ内で記された所属先等は平成八年四月一日現在
のものです。文中に登場する各隊員の所属先等とは異なる場合があります。



此为上図は、国土地理院発行の地形図(5万分の1)の一部を複写・転載したものです。©国土地理院

[illegible]

企画・取材——丸山直樹

編集——土屋弘明

装丁・デザイン——原口健一郎

写真提供——富山県警察山岳警備隊

A black and white photograph of a snow-capped mountain peak. The mountain is rugged, with dark, rocky ridges and slopes partially covered in snow. The sky is overcast and grey. A vertical white rectangular box is superimposed over the center of the image, containing the title text in Japanese.

第二章
生死を分けた一瞬

山稜の光と影

高瀬 洋（大沢野署／小隊長）

それは電話の呼び出しで始まった。

平成三年三月十三日、所属長クラスの定期異動があり、新体制となった。

我々常駐隊七人は、新しく親方となった防犯部長、外勤課長にあいさつのため本部へ行った。

二人とも、山にはなかなか理解がありそうで、嬉しくなった。特に防犯部長の訓示は、

「私は君たちを選ぶことができるが、君たちは上司を選ぶことができない。山で救助活動に当たる君たちの仕事は大変だと思うが、私が命令したら従ってもらう。やるべきことはやり、遊ぶときは思いきって遊んでもよい。私もできるかぎりのバックアップをする……」

「んんん！ ……んん？」

いまだかつてない、インパクトのある言葉であった。

山に理解のある上司に恵まれたことを喜び、今年も一年頑張るぞ！ と闘志が湧いてきた。

田舎から出てきた私たちは本部のあいさつが終わってもすぐに帰署せず、富山の町を楽しむことに決めた。佐伯乗彦と二人、行きつけの食堂でおいしいものを腹いっぱい食べて満足感に浸っていた。

「高瀬さんか佐伯さん、いませんか？ 電話です」
突然の呼び出し。

「ん？ え？ なんてこんな店にまで電話がかかるが？ どうして？」

慌てて出ると、

「高瀬け、川原だけと、『とうなん』で召集がかかるとるぞー」

「しまった」

曲断大敵、私も乗彦も大事なときにポケベルを入れていなかった。

訳はわからんけど、とにかく帰署しなければと、急いで車に飛び乗った。

しかし、よく考えてみると、駐在所が電話してくるのも変だし、山岳常駐の我々にまで召集がかかるとは、よほど大事件に違いない。いずれにしても、ポケベルのスイッチオフが悔やまれた。

そのくらの事件ならニュースに流れていないかとラジオのスイッチを入れる。ちょうどニュースの時間で、「今日、午前十一時頃、^{つぎはやく}剣岳早月尾根において、東海大学山岳部員三名が^{ひがふもと}東大谷へ転落、行方不明となり、安否が気づかわれています……」と放送していた。

とうなんではなく、遭難の聞き違いであった。よほど慌てていたらしい。

それにしても、事故発生から三時間近くもたっている。この天気なら、早い者はヘリコプターで現場

近くへ送り込まれているだろう。防犯部長の訓示を聞いたばかりなのに、常駐が遅れをとったことが悔やまれた。私たちと連絡が取れず、署の幹部がイライラしているのが目に見える。隊長が細い眼を三角にしているに違いない。

署内は慌ただしい雰囲気にもただちに出勤命令がくだった。

こうして生涯忘れることのできない、東大谷の東海大学生遭難救助活動は、電話の呼び出しから始まった。あの東大谷へ滑落したからには、三人の生存はまずありえないであろう。

人喰う山

出勤準備の慌ただしいなかで、遭難の概要を聞く。

遭難した東海大学生は、リーダーの文学部四年K・Tさん以下八人で、三月十日、馬場島から入山、早月尾根隊五人と小窓尾根隊三人の二班に分かれ行動していた。

三月十三日、早月隊は二二〇〇メートル地点から剣岳頂上を目指した。獅子頭からカニのハサミ、さらに上部の別山尾根との分岐点となっている最後の難所は、二人と三人でザイルを結んで登っていた。

滑落したのは、工学部三年S・Aさん(二二)、工学部二年H・Kさん(二〇)、工学部一年I・Sさん(二〇)で、分岐点最後の煙突状に吹き上げる水壁を登攀中、滑落したことがわかった。

とりあえず活動の拠点となる馬場島へ向かうことになった。

春山第一号遭難で、しかも場所が「魔の谷」と恐れられる東大谷であることから、救助活動に相当の困